

# 土と水と火：陶工の集落構成に対する生産・需要・供給関係の影響について：日田市小鹿田皿山の社会人類学的調査から

モーラン, ブライアン

<https://doi.org/10.15017/2231616>

---

出版情報：九州人類学会報. 7, pp.24-32, 1980-03-31. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

# 土と水と火 —陶工の集落構成に対する 生産・需要・供給関係の影響について—

(日田市小鹿田皿山の社会人類学的調査から)

ブライアン・モーラン

私は、ロンドン大学、アフリカ東洋学会の社会人類学部の者で、この2年間、博士課程論文を書くために、日本でのフィールドワークにまいりました。今まで、外国から来た社会人類学者や文化人類学者が、農村社会や都会に有る会社等の研究をした事はありますが、私は百姓や商人じゃなくて、工芸品をつくっている人々の社会構成に興味を持っていました。特に、バーナード・リーチ (Bernard Leach) というイギリスの陶芸家の作品にひかれて、焼物の問題を中心にして、日本で研究しようと思って居りました。

焼物というと、大体3つの分野に分けることができます。まず、瀬戸や有田にある様な大産業があります。そういう所では、窯は常に焼いていますし、ろくろの代りにいろいろな機械を使っているところが普通です。こういう所は結局、松下電機や住友精密の様な工場組織とかわらないようです。第2番目には、有田と全く反対なイメージを持っている個人窯がポツポツ日本中に有ります。こういう所では、陶工が単独で窯を焼いている形態や自分の息子や1人か2人の職人と一緒に焼いている形態などがありますが、できるだけ名を売って、芸術家になろうとしている陶芸家が多い様です。最後には、全く芸術が嫌いで、家族の者と一緒に焼物を造っている人もいます。こういう人達はよく他の同じ様な焼物づくりと共同して村落を構成し、職人や弟子を雇って一緒に暮らしています。こういう共同体的な社会構成を大事にしている所は、福岡県の小石原、鹿児島県の(リュウモンジ)や(ナエシログワ)、島根県の(フジナ)(ユマチ)や(シュッサイ)、それに福島県の会津本郷が有ります。

私は、この最後に述べた様な焼物造りに興味を持っていましたので、彼らのコミュニティの社会構成を研究しようと思って居りました。特にまだ共同窯を使っている村ということで、大分県日田市モトエ町の皿山小鹿田という部落を選びました。

日田市といっても、皿山はまだ田舎で、山奥の海拔460mの小さな部落です。全部で14軒から成り立っていて、10軒が焼物を専業としています。この14軒はいうまでもなく深い親戚関係を持っていて姓は4つしか有りません。村が形成されたのは270年程前のことです。当時から外界とはずっと遮断されていて、日田までの道もないぐらい山奥でした。しかし、最近、柳宗悦(ムネヨシ)の民芸運動のおかげで、小鹿田はますます有名になりまして、立派な舗装された道ができました。現在1年中貸切バスが登っていきますから、全くの観光地になって来ました。冬は寒く、雪がいっぱい積りますので、時々バスや車は皿山まで登って行くことができません。しかし、民芸評論家等の言う通り、この辺は本当に自然に恵まれています。

山はほとんど全部杉が植えてあります。この杉を切ってもらって、窯の焚物に使っています。窯は全部登り窯になっています。1つの共同窯を5軒が使い、あとの5軒は個人窯を使っています。昔(というと

昭和30年頃まで)窯のふくろには砂の坂しか無かったので、焼物はそのままポツポツ置いて焼いていましたが、現在有田から買った棚板を使っています。できた物は大壺、傘立て、大花瓶、ウンスケ、普通花瓶、ピッチャー(リーチからおしえられたピッチャー)、青と黒土瓶、急須、湯呑類、皿類、コーヒー・カップなどです。昭和47年に、小鹿田の技術は無形文化財として指定されました。

土(陶土)はいくらでも有るらしく、部落のまわりから掘っています。現在、ブルドーザーを使って、大体3年おきに、1日だけ掘ってもらったら充分足ります。ロクロでは、土が弱いので「練り付け」あるいは「ひもづくり」という作り方を使わないと、中位や大きい物ができません。ロクロの仕事は男によって分担されていて、女の人は土漉ししたり、土瓶や急須の口と握りを付けたり、小さい物に薬をかけたりにしています。男は大きいものに薬をかけて、小鹿田焼は特にうちかけや流しという薬かけ方法として有名です。デザインとしては「刷毛目」や「とびがんな」も珍らしくて、人に注目されています。

さて、私ははじめて小鹿田にはいった時、民芸運動がどういうふうには焼物づくりの生活に影響を与えたか非常に興味を持ちました。しかし、焼物づくりをわかろうとしたら、焼物そのものはひとまず無視した方がいいじゃないか、その代わりに、焼物の材料の取り方はうんと大事だとだんだん気が付きました。小鹿田の場合は特に土、水と窯(火)の使い方に集中しないと、表面的な研究しかできないと思います。

まず水と土のことを説明したいと思います。皆様の御存知の様に、江戸時代の農村の発達は大体水田の水の量によりましたので、水の権利が無い場合、分家をつくるのは大変難しいことでした。小鹿田の皿山の場合、もちろん田んぼが無いと次男や三男が自分の家から分かれることが出来ませんでした。水の権利は水田だけには限りませんでした。何故かという、焼物をつくらうと思えば、部落の近所にある陶土を使わなければなりません。しかし、小鹿田の土は非常に堅くて、まず粉碎しないとロクロの仕事にはどうにもなりません。つまり、皿山の家々は陶土を砕く機械を持たないと焼物を造るのは無理です。この機械は唐臼と呼ばれて、部落の中を流れている川の水を使っています。最近まで、各家が陶土唐臼2丁と米用の小さな臼1丁を持っていました。(現在、米臼をうわぐすりの材料用に使い、陶土唐臼は3つに増やしている家が多くなっています。)土は掘ってから、1週間から10日位唐臼の下においておきますと、完全に粉碎されます。このような事情ですから昔は新しい分家をつくり、その家が焼物づくりをはじめようとする、唐臼の場所を確保することが必須条件でした。その上、仕事の条件として、唐臼があまり家から離れたら、非常に不便になりますから、できるだけ仕事場に近いところに唐臼場所をつくる必要があったわけです。しかし、ちゃんと動くために、唐臼はある程度川の流れの上でないと、実用がありませんので、唐臼と唐臼の間に(現在コンクリートで作られた)「イゼ」と呼ばれる小さなダムがあります。水の落差が足りない場合、「イゼ」をつくれません。イゼをつくれなかったら、唐臼ができない。唐臼が無いと、焼物を生産できません。

ですから、小鹿田の皿山という部落の発達は川の傾斜(落差)と水の量に決定されてきました。傾斜を決める「イゼ」は非常に大事なので、昔は対立を避けるために、ある本家が分家をつくる時、分家の唐臼場所は下流にしないといけません。何故ならば、落差を考えずに「イゼ」をつくると上流の水がたまって、上の方の唐臼が動かなくなる場合もあったからです。しかし川の傾斜だけではなくて、川の水の

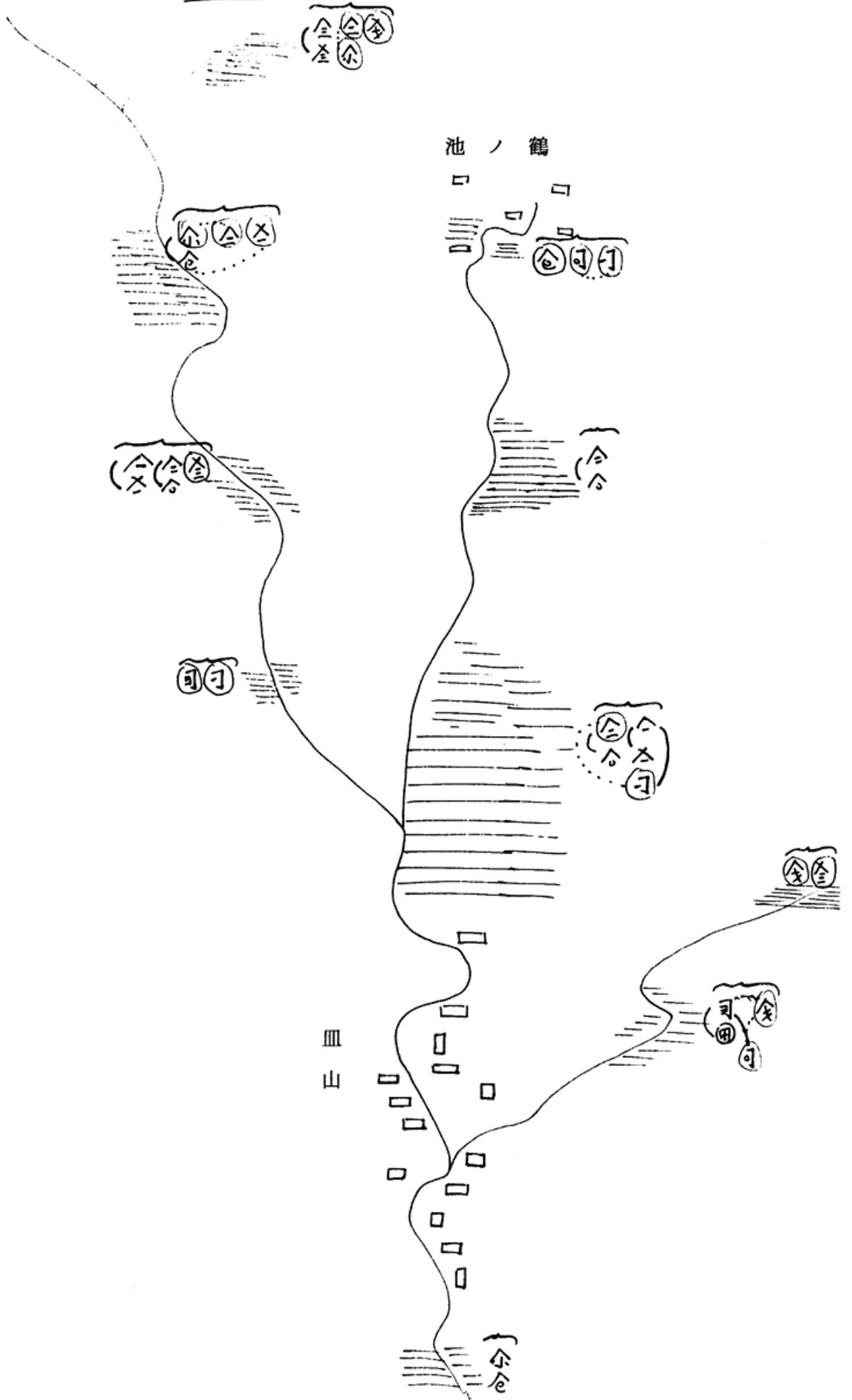
量は部落の構成と家制度に非常に大きな影響を与えています。先に述べた様に、陶土は大体1週間から10日位唐臼の下におかれ、粉碎されています。ですから、ロクロで使える土の量は水の量によって決められます。梅雨の様な雨の多い季節になると、水が多くなり、唐臼は速く上下運動をします。そして陶土がすぐ出来上がります。(早い場合4日しかかかりません。)秋になって、雨が全然降らない場合、唐臼はのんびりして、なかなか土を砕かないのです。この様にしてつくられる土は一家で2人の男が1年間に使用する分量しか生産されません。この2人というのは戸主と、例外を除いて、長男を意味します。職人とか弟子を入れることは出来ません。皿山の家制度は川の水の量によって成り立っています。

唐臼は今でも使っていますから、小鹿田の皿山部落の社会構成は変わりません。ここで、福岡県小石原の皿山部落と比較をしたいと思います。小石原は小鹿田から20kmほど離れたところにある陶工の部落ですが、2つの部落の窯はお互いに「兄弟窯」の関係にあり、小石原の方が古い歴史をもっています。小石原の窯は秀吉時代に朝鮮から連れて来られた陶工達によって作り始められたそうです。昔から部落全体としては20軒位があって、その内9軒が共同窯2つを使って窯を焼いていました。小鹿田と同じ様に、土を砕くために唐臼を使っていましたが、約18年前あるきっかけから粉碎機が導入されるようになりました。ある窯元の三男が自分の窯を設立するにあたって、唐臼の場所を持つことが出来ませんでした。そこで陶土を粉碎する機械を買いました。それは部落に革命的な影響を与えました。粉碎機を使えば、陶土は1週間ではなくて4時間以内で出来上がります。これに気が付いた他の窯元はすぐ唐臼を捨てて、粉碎機を購入し始めました。なお、出来上がった土は山の様になりますから、家族だけでは人手が足りなくなり、長男だけではなく、次男、三男も一緒にロクロの仕事をしてはまだ土は余る程でした。そこで、弟子を入れて、職人を雇いだした時から、家制度は完全に変わってきました。以前には次男、三男はどうしても家から出て、仕事をさがさなければなりませんでしたが、今では、彼らが望めば、すぐ分家をつくってもらって、陶工を志すことが出来ます。小石原の窯元はこの10年間どんどん増えてきました。現在、36軒にまでなっていますが、その中の27軒は血縁関係をもっています。

陶土の性質について、もう一つの点に注目したいと思います。先に述べた様に、小鹿田の土は非常に堅いため、簡単に焼物を造れません。日本でよくつかわれている「ヒキヅクリ」をやると、焼物が乾く時土がよく割れたりするし、大きいものも出来ません。ですから、六寸皿以上になると、どうしても「ヒモツクリ」という造り方で焼物を造らなくてはなりません。小石原の場合、土は小鹿田の陶土より柔らかく、粘りも有りますので、ヒモツクリを使用する必要はなく、また電気ロクロも使えます。電気ロクロを使うと生産量も増すことができます。それに対して小鹿田の場合、ヒモツクリですから「ケリロクロ」しか使えません。しかも小鹿田の生産量は土の性質と水の落差と量で限られています。それだけではなく、土の性質のため、つくるものの形が決められています。このことについて一後で述べますが一民芸評論家は少しもわからないので、いろんな問題が起こります。

今から社会組織に集中したいと思いますが、特に土、水と火はどういうふうに皿山の人達の生活に影響を与えるかここで述べたいと思います。日本の部落組織はどこでも共同仕事を大事にして、皿山は他の稲作をしているコミュニティとは別に違いません。こういう共同仕事をする場合、部落の人々が大体本家分

TEMAGASHI.



家や血縁関係に頼って、手間返しや加勢をしたり、組、講をつくったりしますが、私の考えでは共同仕事は親族関係（Kinship）よりも土地の所有から生まれてきたのではないかと思います。例えば、田植えの手間返しをみると、14軒の中、本家と分家や血縁関係の人々はよく一緒に田んぼで稲を植えますが、例外も大分あります。

この地図を見れば、わかると思いますが、田んぼが接触していることは結局親戚関係より大事で、この土地所有が手間返しの組み立てを決めるわけです。

もう一つの共同仕事が山作についても同じ様な形で成り立っています。昔から、山林が伐採された後、皿山の人々は「もやい」という組をつくって、山作をしました。まず、残された木をおろしてから、伐採された土地に火をつけました。それから5年の間順番で蕎麦、小豆、大豆と芋を植えたりして、収穫したものを平等に分けました。こういう「もやい」をつくっている家を検証してみると、ここでも、本家分家や血縁関係がみられますが、全く関係の無い家が「もやい」をつくって共同山作をしていることもあります。しかしそれには相当の理由があって、共に山を所有している家は大体一緒に「もやい」をつくっていました。ですから、また土地所有が社会組織に大きな影響を与えました。

最後に、焼物づくりは最近まで土掘りのために共同仕事をしました。この場合は、親戚関係や土地所有は別に関係が無く、生産の要求が窯元の組織を決めたわけです。毎年、3、4回各家から男1人と女1人が4日、5日位陶土を掘ったり、「土めぢ」で運んだりしました。この陶土は出来るだけ平等に積み重ねてから、皆がくじを引いてどの土を持って行くかを決めました。

焼物づくりは昭和30年頃までほとんど全部が共同窯を焼きましたから、窯元の結束は特に強力でした。共同窯は昔日本中でよく使われました。小石原やナエシロガワそれにリュウモンジの様な陶工の部落にもありましたが、最近ほとんど無くなりました。色々な焼き方が有りますが、小鹿田の皿山の場合、共同窯は8つのふくろから成り立っていて、このふくろを出来るだけ平等に分配して、焼物を焼きました。例えば、10軒が使う場合、2組に分かれて、交代交代で焼きましたが、各組の中ではふくろがこういうふう

1	2	3	4	5	6	7	8		
a	b	c	c	b	d	e	a	1 st , 6 th	1910-27
e	a	b	b	a	c	d	e	2 nd	
d	e	a	a	e	b	c	d	3 rd	
c	d	e	e	d	a	b	c	4 th	
b	c	d	d	c	e	a	b	5 th	

共同窯の使用

軒数	組立て	窯のふくろ								時代	
		1	2	3	4	5	6	7	8		
9軒組	5軒 4軒										1927-35
8軒組	4軒×2	a	b	c	d	d	c	a	b		1935-48
		d	a	b	c	c	b	d	a		
		c	d	a	b	b	a	c	d		
		b	c	d	a	a	d	b	c		
7軒組	4軒×1 3軒×1	上と同じ									1948-1962
		下と同じ									
6軒組	3軒×2	a	b	b	a	c	b	c	a		1962-1971
		c	a	a	c	b	a	b	c		
		b	c	c	b	a	c	a	b		
5軒組	3軒×1 2軒×1	上と同じ									1971-
		a	b	b	a	a	b	a	b		
		b	a	a	b	b	a	b	a		

共同窯は各ふくろの容積を考慮して分配されています。下の方のふくろは上の方よりも小さくて、6番と7番目はいちばん大きくなっています。

ここで注目すべきことは社会組織と生産の関係です。共同窯を使っている焼物づくりは同じ容積をつかって焼物を積んで焼くわけですから、やはり互いに同じ量をつくらなければなりません。というのは、窯元は皆同じ量を生産しただけではなくて、出来上がった焼物を日田の商売人に売った場合、皆の収入は同じでなければなりません。地主と小作の関係をもっている百姓の部落とは違って、陶工の部落の人々はずっと経済的に平等で、互いに財産は違っても、余り大きな差があらわれませんでした。言い換えれば、ある意味では昭和30年頃までの小鹿田の皿山という部落は、資本主義にあこがれているアメリカの社会よりも、民主主義に近かったのです。(もちろん、本当の民主主義は実現したとは言えません。特に、年齢階梯制度が有って、若い者の意見や自由さを無視したところも大分有った様ですが、それはそれとしても、東北の大家族の様な封建制度とは、皿山は随分違いました。)

しかし、昔、窯元は全部共同窯を使っていたのですが、現在10軒の中で5軒しか一緒に焼いていません。まず、ある窯元が不景気のために窯焼きをやめました。昭和10年頃もう1人自分の個人窯をつくって、共同窯からわかれた人がいて、村八分になった様な話を聞きました。このことは共同窯が部落には非常に大事な組織だったことを示すと思います。戦後まで、残りの8軒が一緒に焼いていましたが、部落のいち

ばん下に住んでいる窯元は、仕事場は窯から非常に遠いため、自分の窯をつくりました。そして昭和37年、共同窯をつくりなおす時、もう1人の窯元が仕事場は窯から遠すぎるという理由で、共同窯からわかれしました。しかし、昭和37年になると個人窯の発生をうながすようなもう1つの理由が出て来ました。それは、需要供給の問題で、戦後の不景気がやっと終り、何でも売れるようになってきた時代でした。特に、柳宗悦の発表した民芸美学理論がはやってきて、小鹿田でつくってる様な民芸焼物は急激に売れるようになりました。つくればつくる程、焼けば焼く程ものが売れると、1人で仕事をしている窯元と自分の息子と一緒に焼物をつくっている窯元の生産量がかわって来ました。昭和37年共同窯から別れた窯元はやはり時間と手間と生産需要供給の関係を計算してから、個人窯をつくりました。そして、一生懸命働きながら、自由に焼きました。その一方、まだ共同窯に残っている家は互いに都合を考慮して仕事をしなければなりません。個人窯をつくった家はどんどん金を儲けて、昭和40年代、経済的な格差がだんだん起こって来ました。共同窯をつかい1人だけでつくっている窯元は量が少なくても他の人の都合にあわせるため、一緒に窯を焼かねばなりません。ですから、今年の収入をみると、ある窯元は1千万円を儲け、もう1人は五百万しか儲けませんでした。

その上、部落の中に色々な問題が起っています。まず、窯を焼いている家と焼いていない家との間には非常に大きな経済的格差があって、後者は「銭が無いから阿呆になっている」と自分で言っています。窯元はよく勝手に部落全体の祭や事業のことを決めたり、部落のお金を使ったり、部落の土地を買ったりしようとしていますので大分摩擦が起きています。それだけではなく、手間と仕事の時間を計算したら、昔と同じ様に米を作ったり、山作をしたりするのは時間の無駄だと気が付いて、窯元は百姓の生活をまるで捨ててしまいました。それで、言うまでも無いでしょうが、昔部落組織の結束を強めていた共同作業がなくなって、窯元も最近では焼物をつくる時間の価値をよく知っているの、土掘の共同仕事をやめて、ブルドーザーを雇って陶土を掘ってもらっています。昔、いそぐ場合人に頼んで仕事の加勢——つまり無報酬の労働をしてもらっていましたが、最近では人を雇わないと、いわゆる手間賃をださないと誰も手伝ってくれません。この部落の人はある意味では日本風のエコノミック・アニマルになったと言えるでしょう。

今まで、部落内の共同作業に集中してきましたが、これからもう一つの需要供給の問題を述べたいと思います。これは窯元の社会組織に間接的な影響を与えて、民芸運動から生まれた問題です。つまり、窯元が焼物を日田や東京、大阪などの民芸店に売って、買う人がこの焼物に対しては美的感覚を大分持っています。特に民芸評論家が色々なアドバイスをしたり、民芸誌や週刊雑誌で小鹿田の焼物を評価したことがあります。あいにく、評論家の考えることと皿山の焼物づくりの焼物に対しての考え方はまるで違います。

ひとつの問題は土の性質から生まれています。民芸協会の人達がこの数年間焼物の形についていろんなアドバイスをした様ですが、窯元の困ったことはこの評論家には土の性質がわからないことです。例えば、傘立てをつくる場合、底はもう少し広くつくってもらいたいとか、コーヒーカップの握りはもう少し低く付けてもらいたい等々言っている様ですが、これは技術的に不可能かまたは商売人の要求を徹底的に無視しているかのどちらかです。先に述べた例をとりますと、傘立てや皿の高台があまり広すぎたら、

そのものの底が乾く時に割れてしまいます。そして、皿の高台が土の性質のためにゆがんでしまったり、形がくずれてしまったりします。同じ様に、コーヒーカップの握りを低く付けようとしたら、手の指がはいらない様になりますから、カップを大きくつくらないと、形がよくなりませんが、民芸店を経営している商売人は大きいコーヒーカップは欲しくない。小さければ小さいほど、ものが売れますから、形のために大きくつくると困ります。それだけではなくて、商売人の話によると、形よりも、色や模様次第で焼物は売りさばけるので、ものの形はどうでもいいそうです。

焼物の形の点では、焼物づくりと民芸評論家の意見が異なり、色や模様の点では、商売人と意見が違ってきます。そのどちらも技術的な問題でして、うわぐすりの色は窯の性質とくすりの材料によって決まってくるのですが、商売人はこれを無視して注文をするので、窯元は彼らの要求を満たすことができません。例えば、青磁の壺の上にアメナガシという注文が来ると、窯元は困ります。何故かという、アメは溶けやすく、いつも窯のふくろのいちばん後でないとつめませんが、青磁は火をたく、いちばん前の棚でないと焼けません。完全な矛盾です。

しかしこういう対立は技術の問題だけではなく、部落組織と関係あります。まず小鹿田焼は刷毛目、トビガンナ、くし目、ウチカケ、ナガシ等の模様で有名で、出来上がった焼物はほとんど全部同じ様な模様をしていて、窯元も皆同じ様なものを毎日つくっていますが、商売をする人にはこれは難しいところで、いつも何か新しい形、変わっている色や模様を要求します。お客さんは新しいものにあこがれていますから、何か違ったものをつくってくれと商売人はよく頼むのですが、小鹿田の焼物づくりは決して新しい形や色や模様をつくりません。

今まで小鹿田焼は小鹿田焼として売っていますが、最近陶芸作家というものがはやってきて、商売人はできるだけ個人の名前をプロモートしたがります。しかし、5、6年前ある窯元が、つきあい上どうしようもなく日本陶芸展という展覧会に個人として出品するようになって、外務大臣賞を受けました。あつというまに、彼の名前は世に出て、マスコミに追いかけて、部落の中では大分問題になりました。他の窯元も同じ様な大壺をつくれれば同じ賞をもらえると信じています。

もしある窯元が色々な研究をして、新しい形や模様の焼物を売り出したら、又もし「小鹿田焼き」としてではなくて、自分の名入りで売り出し始めたら、他の窯元は彼が部落を裏切っていると必ず思い込んでしまいます。

よその世界に才能が認められている窯元はまだ若い人で、彼の立場は随分強くなってきました。しかしこの人の若さは年齢階梯制度と対立しています。民芸運動の評論家は特にこういう傾向を生み出したことについて責任を負っています。

部落の社会内部から発生した個人の問題は、焼物の小売り値段にもあらわれています。5、6年前まで各窯元が卸し値を自分で決めて販売しましたが、商売人が日田の民芸店で小売りをするときには、いいものと悪いものを完全に分けて、前者に非常に高い値段をつけています。しかし、ものの値段が高くなるとそのものをつくった人の名前は高く評価されてきますので、皿山の若い焼物づくり2、3人が相談してから、山からの卸し値を皆で決めたらどうかと他の窯元に提案しました。これによって、昭和51年から、皿

山のどの家をたすねても焼物の値段は同じになりました。若い焼物づくりの提案の裏にある考え方は結局「よその人が民芸店にいて、高い値段がつけられた焼物を買っても、別にそのつくっている人が上手だとは言えない。部落の中では、焼物づくりは皆同じで、特別な才能を認めない。」ということだと思えます。

結局大きな矛盾が2つあります。その1つは、焼物の評価は必ず個人の名前をプロモートしますが、一方、日本の根本的な集団組織原理は個人というものを認めない家制度である矛盾です。もう1つは、部落の社会組織は表面的にコミュニティであり、個人の才能は絶対に許しません。しかし、戦後西洋の影響が非常に強くなったため、家制度はだんだんくずれてしまったり、行政的単位としての部落の制度も無くなったりしていますので、急激な社会変化の中では部落の人は新しい生活に適応しなくてはなりません。ただ、適応するのはそんな簡単なことではありませんので、皿山の人は非常に保守的な考え方に現在頼っています。部落の組織を守るため、“伝統”と“昔”というふたつの概念がつかわれています。焼物はいつまでも“伝統”的でないといけないという考え方は強くて、新しい形や模様を許さないというのは、個人の才能があっても、部落のためにこの才能をよその世界に見せないことです。一方、“昔”という概念は昔からつづいてきた共同生活の良さを何回もくり返し強調することによって、できるだけ窯元10軒と窯を焼いていないあとの4軒との間の対立を隠すためにつかわれています。この2つの概念は部落のイメージをしっかりと守って、よその人から部落の人を保護しています。